

## 「西洋古典籍デジタルアーカイブ」公開の意義

小 野 塚 知 二

東京大学大学院経済学研究科・経済学部は、日本で経済学の専門的な研究、教育を行う機関のうち、最も古いものの一つです。日本において、江戸時代以前にも経済学的な思考というものがあったわけではありません。しかし、日本の経済学の歴史を振り返ると、西洋においてすでに発達していた経済学、経済学的なものの考え方を導入するという方法で学問体系を構築してきました。

経済学という学問が自立してくるのは、日本でも 19 世紀の末から 20 世紀初頭にかけてのことです。その頃になると、お雇い外国人を連れてきて教授してもらうという方法ではなく、日本人みずからがヨーロッパ行って勉強し、また向こうの本を買って日本に持ち帰り、それに基づいて学生に講義をしましたし、学生もヨーロッパの書物を直に読んで勉強するようになりました。このように、日本の経済学は比較的早い時期から、欧米で発達していた経済学と、ほぼ同時代的に研究が進み、教育をしていたと言えるでしょう。

したがって、東京大学経済学部、あるいは経済学部の前身であった法学部各教室の教員が非常に力を入れたことの一つは、海外から大量に書籍を買ってきて図書資料として保存、公開するということでした。少なくとも、経済学部においてはそれが非常に大きな仕事の一つだったのです。これは、谷本館長の方から話があった通りですが、改めてアダム・スミス文庫、エンゲル文庫、メンガー文

庫などのコレクションにどのような意味があるのかということをお話しします。

アダム・スミスが持っていた、あるいは使っていた本の学術的価値とは何でしょうか。アダム・スミスは経済学を世界で最初に創り上げた人物です。これは他の言葉で言い換えると、「市場を発見した」ということに尽きるでしょう。市場という人知を超えた、ある働きをする場、ないしは機能があるのではないかという、そのことを世界で最初にアダム・スミスが発見し、体系的に叙述することに成功したのです。では、アダム・スミスのそういった経済学の出発点にある発想とはどのようなもので、アダム・スミスはどこからそれを学んだのでしょうか。

アダム・スミスは 18 世紀の後半の人ですから、交通が非常に不便です。しかも彼は、ヨーロッパの辺境中の辺境ともいってよい、スコットランドのグラスゴウで研究を続けてきた人です。彼自身は、若い頃にヨーロッパを何度も訪れてはいますが、基本的にはグラスゴウにいたわけですから、他のヨーロッパの研究者たちと付き合うことはあまりないでしょう。ですからアダム・スミスは、研究する上で必要なヨーロッパの様々な書物を購入するわけです。そして自分の書斎にこれらの書籍を置いて、目録まで作り、一種の私設の図書館のようなものを持っていたのです。

これらの中には、たとえば医学・生理学・動物学・植物学・天文学といった分野（実際

にアダム・スミスは天文学の論文も書いていたりするのですが)のものもあります。それ以外に、詩や戯曲をはじめとする文学や、歴史学、それからもちろん、大陸の様々な国の法律学の文献や、当時徐々に出版されつつあった経済的な思考を論じた、いわゆる経済書といわれるようなものが含まれています。

17世紀から18世紀ごろのヨーロッパでは、特にイタリア、フランス、そしてドイツ語圏、こういう所が当時のヨーロッパにおける「知の世界の先進地域」であって、イギリスはそれに比べると後進地域だったのです。アダム・スミスは、そういった先進地域で出版された、フランス語やイタリア語やラテン語、ないしはドイツ語の、当時の最先端の知識の詰まった書物を数多く買い求めて、それを読み、分類していったのです。ですから、本によっては書き入れがあったりします。

そうすると、アダム・スミスが、何を勉強して経済学や『道徳感情論』にたどり着いたのか、あるいは市場の発見と天文学の研究は、彼の思想面から検討した場合にどう結びつくのかといったことが、アダム・スミスが使った書物、また、その書き入れを仔細に検討することによって、これまでよりも良く分かってくる可能性があります。こう考えると、経済学図書館が、アダム・スミス旧蔵書三百数十点<sup>1</sup>を所蔵しているのは、非常に大きなことであると言えます。

現在でも時々アダム・スミス旧蔵書の一部が、国際的な古書市場に出てくることがあります。しかし出てくるといっても、せいぜい1冊から数冊なのですが、小さな本でも数百万から数千万というとても高い値段がついています。ですから、現時点で、三百数十点を揃えるというのは金銭面でもほぼ不可能で

す。この経済学部の先人たちが、私財を投入したり、様々な工面の末にそういったものを日本に持ち帰ったという事実の意義深さは、こういった点からも理解できると思います。これは世界的に見ても稀有な事例です。

ただし非常に残念なのは、経年による物理的な損傷が進んでいることです。本には二つの側面があります。文字や絵柄が印刷された紙を束ねて綴じて装丁したという物理的な存在としての側面と、今風にいうとコンテンツと呼ばれる、書かれた内容という側面があります。本を利用する可能性というのは、物理的な特性のほうに制約されます。周知のように、西洋の古い本は、基本的に糸で綴じた紙面を革で装丁します。ところが、革装は古くなってくると様々な点で不都合が出てきます。革や紙の劣化が進み、綴糸が収縮して本がほとんど開かなくなってしまうようなこともあり、こういった本を無理に開こうとすると、背の所でパッキリと二つに割れてしまいます。

これは日本に限ったことではなく、世界のどこにあってもヨーロッパの古い本は、10年100年と経てば劣化が進みます。そこでそのたびごとに、一旦解体するなどして修復することになるのですが、修復しても、50年100年経てば、また劣化が進んで非常に使いにくいものになります。経済学図書館で所蔵しているアダム・スミス文庫内の本にも、状態が悪くて閲覧に供せないものが随分ありました。そもそも、そこまで劣化していなくても、やはり200年以上前の古い貴重な書物ですから、希望されたからといって、どれでもすぐに閲覧に供せるというわけではありません。

近年、アダム・スミス研究は、国際的にスコットランド啓蒙思想の評価が進んでいることもあり、今後のさらなる研究の展開が期待

できます。そうした中で、英語圏のみならず、イタリア語圏やフランス語圏にも新しいアダム・スミス研究者が、数多く生まれています。彼らの間では、東大経済学部がアダム・スミスの旧蔵書を三百数十点持っていることは、カタログも出ていますからそれなりに知られているわけです。だから彼らは、東大経済学部に来ればアダム・スミスが昔使っていた本が閲覧できると考えてやって来きます。ところが、急に来館されても手続きを踏まない限りは見せられませんし、あらかじめ予約されていても、状態の悪い壊れた本は見せられません。このため、せっかく海外から訪れたアダム・スミス研究者に、閲覧を謝絶することがこれまでに何度もありました。

実をいうと、その点で経済学図書館は国際的な評判が非常に悪かったのです。しかし、こちらとしてもこれ以上の物理的破損を進めるわけにはいきませんし、これらを完全に修復するには、金銭的な負担が非常に大きく時間もかかります。結果として、本がその物理的な存在に依存する限り、閲覧できないものが時とともに増えていくという悪循環に陥らざるを得ないのです。

今回作成した「西洋古典籍デジタルアーカイブ」には、アダム・スミス文庫中の本も多く入っています。背が硬くて開かない本の各ページの画像を綺麗に再現するという最新技術も用いて、先ほどお話したような物理的な状態を気にすることなく、世界中の人々がまるで自分で本を手にとっているかのように使うことができるようになりました。具体的にはアダム・スミスの旧蔵書からは 234 点をデ

ジタル公開しており、これは学内限定でも、有料でもありません。東京大学 OPAC にアクセスできる環境さえあれば、綺麗なカラー画像が完全にダウンロードできます。われわれのプロジェクトにおいて、世界中どこにいてもアダム・スミス旧蔵書のうち、234 点はたちどころに居ながらにして読めるということをやりました。これは、今後、経済学の誕生について研究する上でも、あるいは 18 世紀のヨーロッパの知のあり方や、より総合的に俯瞰する新しい思想史や学史の研究を進める上でも、非常に大きな刺激を与えるものになるのではないかと、われわれは期待しています。

アダム・スミス文庫については、残された百近くについても、順次デジタル化して公開したいと思います。それにはもちろん、膨大な費用がかかるわけですが、外部資金などを活用することで実現にこぎ着けたいと考えています。経済学図書館の設立時期は、こんにちに比べれば古典籍が比較的安い値段で手に入る時期でもあり、そういう時代の利点を生かして先人たちが一所懸命、貴重な資料を収集してきました。こういった資料のデジタル化を進めることで、物理的な破壊を防ぐとともに、世界中の誰にでも、来館せずとも読んで使っていただきたい、というのがわれわれの基本的なスタンスです。今回はそのための大きな一歩を踏み出したということで、改めて記者会見を設定し、皆さまに知っていただくと考えた次第です。

(おのづか ともじ:東京大学大学院経済学研究科教授)

<sup>1</sup> 新渡戸稲造が寄贈した際の冊数は 303 冊であるが、その後の購入等により現在では 314 冊となっている。